

子供たちを座標軸に…“相対性”と“メタ認知”

【 $E=mc^2$ 】 アルベルト・アインシュタインが、相対性理論により導き出した著名な公式です。「質量とエネルギーは等価である」ことを表しています。

相対性理論は「時間は人によって流れ方が違う相対的なものだ」というものです。どこかに絶対的な原点を置く座標系ではなく、観測者の立場によって互いの時間と空間は（独立的ではなく）相対して変わるという理論です。つまり、私の1秒と、あなたの1秒は同じではない、ということです。アインシュタインが、ニュートン力学の大前提であった「絶対空間」「絶対時間」というものに疑問を突きつけたのです。

お互いの関係そのものが重要だと考えた。これが「相対性」の基本的な立場です。

この夏を振り返ると、東京五輪でアスリートたちの人生を賭して挑んでいる姿に、多くの感動がありました。それを支える人々、それに便乗する人々、それを口実に自己弁護する人々…。今ほど、人と人との関係の多様性、むずかしさを感じたことはありません。立場によって、思考の視点はまったく異なります。

これからの世界では、相対の中で、常に自分の思考の癖を客観的に見つめながら、相手の思考を推察することが不可欠だと、あらためて強く感じました。自分の視点を絶対的なものと固定した途端、相手のことが見えなくなります。推察とは、相手の思いや事情を状況から察し、理解しようとすることです。内面に隠れていてはつきりと目や耳にできる形で表されていないものを、外から感じ取ろうとすることで、胸中に納めている相手の思いを読み取ろうとすることです。

だとしても、これだけ爆発的に感染が広がる中、沿道で観戦したり、主催者が不要不急の外出を楽しんだり、観光地で遊ぶ人々の「思考」を理解することは、私にとっては、極めて困難です。もちろん、人の思考に絶対的なものはなく、一人ひとり考え方が違って当たり前です。しかし、これほど多様な思考の方向性があるとは、いささか驚きです。

ここで、もう一つ重要なことが、認知心理学の“メタ認知”という概念です。私たちは日常、様々な物事を自分の主観で認知しています。“メタ認知”とは、自分の思考を、客観的に認知することです。“メタ”とは「高次の」という意味で、認知（知覚、記憶、学習、言語、思考）することを、より高い視点から認知するということです。

何かを実行している自分の姿を、外から「もう一人の自分」が見つめるのです。つまり、頭の中で、「自分が考えていることを、考える」ということです。第三者的に、一步引いた視点で、自分を観察するのです。

自分のことは“メタ認知”で捉え、相手のことは“相対性”の視点で慮ることで、相手からしたら触れられたくないことを察し、人それぞれの複雑な事情があるのだと推察することが大切ではないでしょうか。

何が正解か、何が正しいのか、答えは一つではないのです。

ただし、学校において、唯一、絶対的な原点を置く座標軸があるとすれば、それは『子供たちにとってどうか』です。とりわけ、子供たちの安全・安心を最優先に守ることが絶対条件です。もちろん、呪文のように唱えているだけの上滑りの安全・安心ではなく、確固たる方策のある確かな安全・安心でなければなりません。

その前提の下、2学期以降も失敗を恐れずに、さらなる一步を踏み出し、子供たちにとって二度とない“今”を大切にし、“相対的に”正しい答えを導き出して参ります。